

---

# 青い空遙か

doubter

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い空遙か

### 【コード】

N9453E

### 【作者名】

doubter

### 【あらすじ】

雨宿り、雨が嫌いな人でも案外悪くないなと思えるある夏の終わりの話

雨の日は嫌いだ。濡れるのも悪くないなんて言う人の気が知れない。

「はあ、早く止まないかな」

思わず口を突いてでた呟き。灰色の空は更に心を落ち込ませる。やっぱりゴローの散歩なんて引き受けるんじゃないかった。

そんなわけで、彼は今雨宿りをしていた。彼の心を徹底的に落ち込ませている廃ビル達は大規模な工事が行われたが建設半ばで中止になって現在では灰色がむき出しのコンクリの塊と化している。地元の小学生達がゴーストタウンと誇張しているがあながち間違えてはないと彼は思っていた。

携帯を忘れたので傘を持ってきてもらう事もできない。時計も持ち合わせておらず、時間の感覚が分からなくなっているがそろそろ20分位経つと思っておりやや苛立ってきた。最初はただの夕立だと考え余裕をかましていたのだが、これだけ長い間降っていれば違うとも思えてくる。ニュースで言っていた台風が予定より早く来たのかもしれない。

バチャバチャバチャバチャ

雨の降る音に混じって違う音が聞こえた気がした。最初は気のせいだと思った。この辺りはあまり人が来ない。雨ともなれば尚更だ。しかし、雨の音が響く中その音は確実に大きくなっている。雨の音も大きくなった気がした。

バチャバチャバチャバチャカツカツカツカツ

足音であろうその音から水を跳ね上げる音が消え、くぐもった、それでいてよく響くコンクリートを叩く音が聞こえた。彼のいる廃ビルは唯一簡単に内側に入れる場所で中はむき出しのコンクリートの箱になっている。だから、音が急に響くようになったのはそのせいだろう。彼は少し怖くなった。また雨の音が大きくなった気がす

る。

「ハアハア、フウー」

入ってきたのは全身をびしょ濡れにした女の子だった。年齢は彼と同じくらいかもしれない。女の子や少女と言うには大人びているが、女性と言うにはあどけない、まさに子どもから大人へと変化を遂げる最中のそんな感じの少女だ。美人の表現は大外れにはならない美貌を持っていてびしょ濡れになったブラウスが張り付いているのは彼をどぎまぎさせるには十分過ぎる程艶やかだ。走ってきたから息を切らしている。そのせいで肩が上下するのは彼をさらにどぎまぎさせていた。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

気がついたら声をかけていた。彼からはすっかり恐怖感が消えていた。むしろ、自分から全くの他人に声をかけていた事に驚いた。学校でも1人である事も多くあまり他者に興味を持たなかった彼が生まれて初めてこの人に興味を持ったのだ。少なくとも彼はそう思っていた。雨の音は尚も強い。

「ハアハア、はいなんとか」

そう言いながら彼女はハンカチで頭を拭いている。が、明らかに焼け石に水状態である。今も水が髪の前から垂れている。彼は首にかけていたタオルを彼女に渡した。彼女はキョトンとした顔を彼へ向ける。瞳は無垢な女の子のものでそれは彼には眩しかった。雨の中に太陽を見た気分だ。

「も、もしよかったですら使ってください」

彼は火照っている顔を見られないようやや背けながら言った。彼女は納得したようで

「ありがとうございます」

と満面の笑顔で言った。彼は顔を真っ赤にして、俯いた。それからしばらく彼と彼女の他愛のない話を続けた。彼は初対面の人とこんなにも長い時間話すので常にドキドキしていた。気が付くと雨の音はすっかり遠退いていた。

「ウフフ、ところでお名前は？」

彼女は全てを納得したように微笑んだ。廃ビルの中に光が差し込んだ。

「ハルカです。晴れに夏で晴夏。あなたは？」

「じゃあ、私と正反対ね。私はユキ。あの白い雪よ」

きつと何か縁があるのね。と言って彼女は嬉しそうに笑った。因みに、彼女の名前の由来は雪のように煌めいた存在であれという願いだそう。話してくれた彼女の顔は誇らしげで、きつと自慢の名前なのだろうとすぐに分かった。空を見れば、雨はすっかり止んで晴れた青空が気持ち良い。

「また明日ここで会いませんか？」

乾き出したブラウスを風にはためかせながら彼女は尋ねた。彼はもちろん「はい」と答えた。学校でも見せたことのないあどけなくも爽やかな笑顔で。

じゃあね、そう言って彼女は廃ビルから光の中へ消えていった。

風に秋の匂いが始めた。その先にある秋と冬の向こうには彼らの春が待っているだろう。彼と彼女は『彼氏』と『彼女』になって。雨も雨宿りも悪くないと青い空遙かに彼は思った。



(後書き)

相変わらず短いですね。短編、書いてて楽しいんですけど書き方が  
コロコロ変わりそうで怖いです(汗)

読んでいただきありがとうございます!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9453e/>

---

青い空遙か

2010年11月3日14時51分発行